

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 12 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381205

研究課題名(和文)音楽科の学力のミニマムスタンダードに関する実証的研究

研究課題名(英文)An Empirical Research on the Minimum Standard of the Scholastic Ability in Music

研究代表者

山中 文(Yamanaka, Aya)

高知大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：10210494

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、学習指導要領音楽科における〔共通事項〕に示された音楽の諸要素や構造を、音楽科の学力を形成する教育内容のミニマムスタンダードとして精査し、それらの教育内容としての段階性を踏まえたモデル授業を開発することを目的とした。我が国の音楽科の教育内容論やそれにかかわる授業構成の変遷を分析し、小学校音楽科事例を検討することから、教育内容としての音楽の諸要素や構造の範囲と段階の課題を明らかにした。それらから、教育内容としての段階性を踏まえたモデル授業を開発・検証した。

研究成果の概要(英文)：This study examines the elements and structure of the music shown in [common items] in the new Japanese course of study as the minimum standard of scholastic ability in music. Further, we develop a model class based on the stage specified in the education contents. Our study analyzes the development of the educational contents theory and class structure related to that in Japan. In addition, we considered several cases of elementary school music classes from the viewpoint of providing instruction in [common items]. We clarify the limitations in the education contents related to the range and stage of elements and structure of the music studied. Moreover, we inspect the developed model class based on the stage of the educational contents.

研究分野：社会科学

キーワード：音楽科の教育内容 授業構成 〔共通事項〕 音楽の諸要素や構造 モデル授業

## 1. 研究開始当初の背景

音楽科で教育内容論が展開されたのは、1980年代になってからであった。それまで「教育内容」に意識が向けられていなかった音楽科において、それ以降、教育内容の概念について、また授業構成において教育内容を設定することの是非について、さまざまに論争が行われてきた。その結果、音楽科において教育内容という用語は定着し、現在では授業研究上で一般的に使用されるようになってきている。平成20年に改訂された学習指導要領で、1980年代に提唱された教育内容に含まれる音色やリズム、速度、旋律等の「音楽構成要素」が〔共通事項〕として具体的に示されたことは、一連の教育内容研究・授業研究の成果とみることができる。学習指導要領で〔共通事項〕が示されたことは、音楽科で学習する内容が明示されたという点において画期的なことであった。

しかし、〔共通事項〕では、種々の要素や仕組み等が示されたものの、それら各々の段階性や指導の目安は明示されなかった。そのために、〔共通事項〕は、教材研究として教材の特徴をとらえていくためのツールとして用いられてはいるが、授業で取り上げている〔共通事項〕がどの段階であり、次の授業がどの段階の学習になるのかというようにはとらえられていない。

研究代表者らは、これまで音楽の諸要素の概念を明らかにし、その学習の段階性を示し、それに応じた授業構成を論じたり、授業プランを開発したりするなどの予備的研究を行ってきた。その研究の流れと所産から、音楽科の〔共通事項〕を精査し、諸要素や構造の各々の段階性を明らかにしていくとともに、子ども間、教師と子ども間の相互作用を活かした体験型授業モデルによってそれらの学びを検証していくという本研究の着想に至った。

## 2. 研究の目的

本研究は、〔共通事項〕の内容を精査して得られる音楽構成要素の段階性を明らかにし、モデル授業を開発・検証するものである。

先に述べたように、〔共通事項〕で取り上げられた音楽構成要素において、その段階性は明確にはされていない。その点から、本研究では以下の2つの柱を立てた。

第一に、平成20年改訂学習指導要領音楽科に新設された〔共通事項〕における音楽構成要素を、教育内容論やその授業構成の展開の過程を踏まえて精査することにより、音楽科の学力を形成する教育内容のミニマムスタンダードを確立する。

第二に、教育内容の各々の段階性を明らかにし、モデル授業を開発し、検証する。

## 3. 研究の方法

### (1) モデル授業開発の根拠となる研究動向調査

音楽科において、1980年代から展開されてきた教育内容論が〔共通事項〕の設定に至るまでどのように発展してきたのか、そしてそれによってどのように授業構成が開発されてきたか、その変遷を分析し、近年の授業研究の動向を踏まえて現在の音楽科の教育内容研究の課題を明らかにする。

### (2) 音楽科の授業分析

教育内容論が提起された頃から現在にいたるまでの教育内容を中心とした授業プランの変遷や、教育雑誌に見られる音楽授業の傾向、近年の〔共通事項〕を踏まえた小学校事例を検討する。

### (3) 〔共通事項〕における音楽構成要

## 素の精査

(1)(2)を踏まえて、音楽科の学力を形成する教育内容のミニマムスタンダードとして、音楽構成要素を整理する。

そして、小学校と連携し、音楽科のカリキュラムを検討し、全学年を通じた教育内容の各々の段階性の課題を明らかにする。

### (4) モデル授業の開発と検証

教育内容の段階を踏まえたモデル授業を開発・検証する。

## 4. 研究成果

(1) モデル授業開発の根拠となる研究動向調査から

まず、アメリカの音楽教育カリキュラム改革や我が国における民間教育団体の動向などを踏まえ、1980年の千成俊夫による教育内容についての提言をそれ以前の氏の論を含めて分析することによって、千成らの教育内容論が授業構成論の観点から確立されていった様相を明らかにした。

さらに、1980年代以降の教育内容研究の諸相について考察し、教育内容研究に伴って発表されていった教育内容を中心とした授業プランを分析した。そして、千成らの教育内容論とそれらに対する批判論との対立点、日本音楽教育学会における千成らの教育内容論の評価を整理した。

また、そのような教育内容研究の諸相と教育行政における題材構成の理念や実践との違いや、1980年代後半からの授業研究の新たな課題を明らかにした。

そして、2008(平成20)年告示の学習指導要領において示された〔共通事項〕が教育内容論の変遷を背景に持つことを確認した。

それらから、教育内容論の意義として、音楽科においてそれまで無自覚であった教育内容が意識されることになったこと、教

育内容論が様々な授業方法や授業構成に影響を与えたこと、新しい授業構成論の可能性を示唆していることを見いだした。また、一方で音楽構成要素を何と呼ぶのか用語が安定していないこと、何を教育内容とするかということに関しては未だに不明瞭であることなどを問題点として見いだした。

そのことを踏まえ、これからの音楽科の授業構成について、次の4点を提言した。

音楽科の教育内容とする基本的な音楽構成要素を中心に、一部に様式や音楽の機能等を含みながら概念化や操作化をはかった授業構成を段階的に配置すること。

技能的な学習の授業構成を独立させて構築すること。

表現を主体とした授業構成について再考すること。

授業過程における内在的要因を重視する授業構成について検討すること。

これらについては、『音楽科における教育内容論の成立と展開に関する研究—授業構成の方法との関連を視野に入れて—』(関西学院大学リポジトリ・博士論文)で述べた。

### (2) 音楽科の授業分析から

教育内容論が提起された1980年頃から現在にいたるまでの音楽授業の傾向を明らかにするために、1978年から2013年までを中心に月刊音楽教育雑誌における業事例の調査を行った。

その結果、音楽科の授業事例においては、教材中心の授業構成から、文部省で「題材構成」が提唱された1980年代に「題材構成」型授業構成が増え、1980年代後半から教育内容として音楽の諸要素を中心とした授業構成や音楽づくりの授業構成が多く見られだし、次第に授業

事例の掲載が減った教材中心でありながら楽曲に特有の教育内容をとりあげた授業構成に変化している傾向が明らかとなった。

また、近年において、教育内容を複線的に配置している授業や、教育内容をあらかじめ設定せず、子どもの創造的な経験の中でとらえていくというスタイルの授業等について分析を行った。

これらについての詳細は、『音楽科における教育内容論の成立と展開に関する研究―授業構成の方法との関連を視野に入れて―』（関西学院大学リポジトリ・博士論文）に示した。

また、海外のナショナルカリキュラムと授業内容研究として、渡英して調査を行った。イギリスでは、ロンドンのA区児童福祉課を訪れてナショナルカリキュラムの普及度と区独自のカリキュラムについてインタビュー・資料調査を行い、小学校の音楽授業を視察およびインタビュー調査した。その結果、ナショナルカリキュラムを元にした地区独自の活動集の作成や、具体的な活動の指針の明示、音楽の授業における教師の音楽の諸要素等に対する明確な意識等が明らかになった。

### （3）〔共通事項〕の精査

音楽科の学力を形成する教育内容のミニマムスタンダードとなる音楽構成要素の範囲と段階性について、次の三点から言及した。ひとつは、基本的な教育内容として規定される音楽構成要素について、第二に様式や音楽の機能、民族性との関係について、第三に音楽構成要素の下位概念についてである。（『音楽科における教育内容論の成立と展開に関する研究―授業構成の方法との関連を視野に入れて―』）

あわせて、音楽づくりを継続的に行っている小学校と連携して、その小学校で行ってきた音楽づくりの授業研究の傾向

と、児童の音楽づくりへの関心および授業の定着度を調査した。

その結果、ふしやリズムをテーマにした音楽づくりに学年ごとに易から難へといった段階性や、音階や調の選択における段階性が見いだされた。反面、ことばをテーマにした音楽づくりにはそのような段階性がみえにくく、また学年間で行われていない空白期間があることなどが明らかになった。また、児童は、イメージから創作するといった、自由度が高い音楽づくりよりも、ルールにしたがって創作する音楽づくりを好む傾向にあり、またルールにしたがって創作する音楽づくりの方が授業における学習内容の定着度も高いことがわかった。これらについては、「音楽づくりを中心としたカリキュラムの基礎的研究：高知大学教育学部附属小学校児童の音楽づくりに関する関心調査から」「音楽づくりを中心としたカリキュラムの基礎的研究2：高知大学教育学部附属小学校における音楽づくりの授業の変遷から」（高知大学教育学部研究報告74、76）に述べた。

これらを踏まえて、音楽構成要素の下位概念を明らかにするという観点から、概念形成の段階性と系統性をふまえて音楽づくりと鑑賞を往還させたカリキュラムを考案した。それらは、同校で作成した『音楽づくり授業事例集 音楽づくりの鑑賞のカリキュラム』に掲載されている。

### （4）モデル授業の開発と検証

（3）においてカリキュラム作成にあわせて、音楽づくりと鑑賞を往還させた、教育内容の段階性を踏まえたモデル授業を開発し、公開授業研究会を開催した。それらは、検討・修正を加えて同校の研

究冊子に公表し、また、同校の調査（上記（2））で、授業内容が子どもに定着した授業のひとつとなっている。

5. 主な発表論文等  
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計7件）

山中文・中山典子・間島ゆり子・渡邊美樹、音楽づくりを中心としたカリキュラムの基礎的研究2：高知大学教育学部附属小学校における音楽づくりの授業の変遷から、高知大学教育学部研究報告76、2016、111-121 査読なし

吉富巧修・三村真弓・伊藤真・徳永崇、わが国の音楽科における共通教材に関する研究－中学校音楽科における《モルダウ》を視点として－、音楽文化教育学研究紀要28、広島大学教育学部音楽文化教育学講座、2016、15-24 査読なし

三村真弓・伊藤真・峯恭子・松下友紀・吉富巧修・井本美穂、各国の音楽カリキュラムにおける鑑賞・聴取領域の内容に関する研究－コンテンツベース、コンピテンシーベースの視点を中心に－、音楽文化教育学研究紀要28、広島大学教育学部音楽文化教育学講座、2016、5-14 査読なし

三村真弓・吉富巧修・伊藤真・別府祐子、音楽鑑賞能力に関する研究－聴取力と音楽を感受する力の関連性に着目して－、教育学研究紀要（CD-ROM）61、広島大学、2016、602-607 査読なし

吉富巧修・三村真弓・伊藤真・井本美穂、わが国の音楽科教育における学力観、教育学研究紀要43、広島大学、2015、487-492 査読なし

山中文、音楽科における教育内容論の成立と展開に関する研究－授業構成の方法との関連を視野に入れて－、関西学院大学大学院博士論文、関西学院大学リポジトリ

<http://kgur.kwansei.ac.jp/dspace/handle/10236/13876>、2015、1-202 査読あり

山中文・中山典子・間島ゆり子・渡邊美樹、音楽づくりを中心としたカリキュラムの基礎的研究：高知大学教育学部附属小学校に児童の音楽づくりに関する関心調査から、高知大学教育学部研究報告74、2014、21-34 査読なし

〔学会発表〕（計4件）

Ikuko Tsuzuki, Aya Yamanaka, Yumi Tamase, Misako Kawamata, Tetsutaro Abe, Masaki Taniguchi, Eri Shiba, *Collaborative Programmes Focusing on Multisensory Experience in Early Childhood Education*, The 16<sup>th</sup> Conference of The Pacific Early Childhood Education Research Association, Sydney (Australia), 2015,07.25

Masako Kamakura, Aya Yamanaka, Ikuko Tuzuki, I. Hideaki Okatani, Nobuhiko Yanagibayashi, *Regarding the Significance of Experience of the Events for Children in Early Childhood Education*, The 15<sup>th</sup> Conference of The Pacific Early Childhood Education Research Association, Bari (Indonesia), 2014,08.08

吉富巧修・三村真弓・伊藤真、「ふしづくりの教育」における授業の実際－第3学年の授業を中心として－、日本音楽教育学会第45回大会、聖心女子大学（東京）、2014、10.26

三村真弓・吉富巧修・伊藤真、昭和30年代～50年代の岐阜県飛騨地方における中村好明の音楽教育観の変遷、音楽学習学会、茨城大学（茨城県）2013、08.19

〔図書〕（計2件）

吉田孝・城佳世・川村有美・田中健次・高見仁志・山田潤次・藤井浩基・小池順子・八木正一・三村真弓・山中文、音楽の授業をつくる、大学図書出版、2014、144

吉富巧修・三村真弓・荒木由美・伊藤真・管裕・高見仁志・田中健次・八木正一・山中文・吉田孝他、第2版、小学校音楽科教育法、ふくろう出版、2014、241

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山中文 (YAMANAKA AYA)

高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門、教授

研究者番号：10210494

(2)研究分担者

三村 真弓 (MIMURA MAYUMI)

広島大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：00372764

(3)連携研究者

八木正一 (YAGI SHOICHI)

聖徳大学・音楽学部・教授

研究者番号：70117026

吉田孝 (YOSHIDA TAKASHI)

関西学院大学・教育学部・教授

研究者番号：90158452